わがまちに望む夢

三原の未来を担う子ども達の声を紹介します

— 連載第29回 —

バトンをつないで

三原市立大和小学校6年　岩本（いわもと）　梓（あずさ）

「大丈夫？」三年生の時、運動場で転んで足をすりむいてしまった私を優しく抱き起してくれたのは、六年生のお姉さんでした。

「六年生ってすごい、あんな六年生になりたい」と私が強い印象を受けた出来事でした。

大和小学校は、大和町内五つの小学校が統合して五年目ですが、これまで先輩達はすてきな取組をして卒業していきました。

大和小学校の先輩達が残してくれた取組の一つに「お・と・め」の挨拶があります。

先輩方は、これまで「大きな声で・止まって・目を見て」、「おはようございます。」と進んで挨拶をする校風を着実に築いてくれました。

また、大和小学校の伝統になりつつある「ありがとうの花」の取組では、「あなたの○○なところがすごいよ」と一人一人のよいところや感謝の気持ちをメッセージに書いてくれました。それは、教室にある「ありがとうの木」に貼って伝えますが、そんなところまで私達を見てくれていたの！」といつも感心していました。私達もこの花を低学年の人にたくさん届けられるような六年生になりたいです。

また、運動会等の全校行事や縦割り班掃除の時等、進んで準備をしたりみんなをやさしくリードしたりしてくれました。私達のあこがれの先輩達に多くのことを学びました。

四月には晴れて私達も六年生になりました。大和小学校の先輩達からの熱く重いバトンを受け継ぎました。率先して掃除をしたり、整列したり、やさしい声かけをしたりしてみんなのお手本になるような行動をしていきたいと思います。受け継いだこのバトンにさらに磨きをかけ、次に引き継げるよう私達も頑張っていきます。

三原市立第四中学校2年　藤原（ふじわら）　侑人（ゆうと）

僕は、三原市須波町に住んでいます。須波町には、その名の通り、瀬戸内海に映る山の形が、まるで筆のように見えることから命名された筆影山があります。

僕が住んでいるのは、その山の中腹のため、家の窓から見る一月一日の初日の出は、空へ登っていく太陽と、その光を浴びてオレンジ色にキラキラ光る瀬戸内海が、何とも幻想的で美しいです。筆影山の山頂まで登っていくと、そこには展望デッキがあります。山頂は視点が高くなるため、より広大な瀬戸内海、そして海に点、点とある多くの瀬戸の島々を一望することができます。

筆影山の自慢は景色だけではありません。筆影山を色どる春の花は桜です。山のいたるところがピンク色に染まり、遠目で見るとまるで一本の大きな桜の木に見えるほど、山の全てがピンク色になります。そして秋には紅葉が見られ、山一面が、赤、黄、オレンジ、緑に包まれます。特に春は温かいのもあり、多くの人がハイキングやお花見、ドライブなどに訪れます。自転車で登る人までいます。人がたくさん訪れてくれることはうれしいですが、その人数が増えるにつれ、ゴミが多くなってきている気がします。道の脇に無造作におかれたカン、山に投げ捨てられたビニールや紙袋。良い景色を求めてやって来る人々の気持ちをそこねかねません。

僕はこの幻想的で壮大な景色を地球の財産である自然に「見させてもらっている」と思います。だから、自然を敬う気持ちを最低限持つべきだと思います。一人一人が自然を敬い大切にすれば、ゴミも減っていくし、より美しい景色を望めるはずです。筆影山の自然に育てられた僕たちが、自然を守る活動を推進し、恩返しができるようになりたいです。

※学年は投稿時の学年です。